

**委託事業実施内容報告書**  
**平成29年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業**  
**【地域日本語教育実践プログラム(B)】**

**内容報告書**

団体名：認定特定非営利活動法人教育活動総合サポートセンター

**1. 事業の概要**

事業名称	ともに学ぶ日本語学習支援事業
事業の目的	地域社会で外国につながる子どもたちおよび外国人等市民が、対話型の活動を通して、生活上、あるいは自分のことを伝える上で必要な日本語を習得し、日本語でのコミュニケーションのあり方を学ぶ。また、日本語母語話者も、取組を通して、市民同士としての関係が築けるようなコミュニケーションのあり方を学び、ともに学びあう。そして、これまでの成果を広く地域住民や行政・教育機関等に発信し、地域に暮らす外国人等市民の現状や課題の理解を深め、多文化共生のまちづくりに寄与する。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	この事業を開始する時点では下記のような課題があった。 ①川崎市の外国人等市民の国籍は120カ国以上にわたり、分散して居住し、同国人のコミュニティも少ない。また外国籍年齢別人口では、0～4歳人口が10～14歳人口の2倍以上で年々増えている。日本生育の外国につながる子どもたちを含めるとさらに倍以上になる。多文化・異文化環境で育つ子どもたち(日本生育も含む)は、就学前に学校生活で必要となる日本語を十分に習得する環境にない場合もある。また、保護者は日本での養育や教育に関する情報が不足していることに加え、日本語でのコミュニケーション能力が十分でないことから、孤立し、公的サービスが受けられなかったり、地域社会への参加もできないこともある。そうした現状について、教育関係者やサポーターですらまだ意識が不十分である。 ②地域の日本語学級では話すことが中心で、読み書きの力を身につける機会が少ない。母国との違いに気づいたり、目にするチラシなどから自ら生活に必要な情報を読み取ったりする機会があまりない。自分のことを伝えるのに必要な日本語表現を学びながら書くことなどを通して、自分のことを見つめ直し、考えをまとめることはなかなかない。 ③地域に暮らす外国人等市民の声や地域日本語教育に関する現状や課題が、地域住民や行政・教育等機関に対して十分に発信できていない。 ④地域の日本語学級等で学び、日本語でのコミュニケーション能力が高いバイリンガル外国人等市民が、地域の多文化共生のまちづくりの担い手となる活動の機会は少ない。日本語能力が十分でない外国人等市民のエンパワメントを支えたり、ともに活躍できるような場および日本語のさらなる学びの場が必要である。
本事業の対象とする空白地域の状況	
事業内容の概要	【取組1<課題②③④>】外国につながる子どもたちや外国人等市民が、デジタルストーリーテリング(DST)の手法で、サポーターとの対話活動を通して自分の思いを表現した映像作品を制作した。制作のプロセスで、自分の経験や思いなどを語り、書き、日本語で表現することを学習した。その活動にむけて、日本語サポーター(バイリンガル外国人等市民を含む)が外国人市民の思いを引き出せるような、話の聞き方を学び、語りを構成できる人材の育成をめざす講座も実施した。さらに、外国につながる子どもたちや外国人等市民の声である成果物のDST作品を上映することで、地域住民や教育・行政諸機関の関係者にも視聴していただき、ともに暮らすための課題を共有するために、対話の場も設けることができた。 【取組2<課題②④>】行政・教育関係等機関が発行している文書を行政・教育関係等機関の職員とバイリンガル外国人等市民とが協働で、より「やさしい日本語」に言い換える対話活動を通し、日本語表現の難しさを理解し、日本語能力が十分でない外国人等市民に伝わる表現方法を考えることができた。その成果物を用い、初級の日本語学習者が生活に必要な情報を読み取る講座も行った。その講座の中で、行政関係等機関の職員をゲストティーチャーとして招き、話を聞き、日本語とその背景にある日本特有の文化も学習した。日本語教室への行政からのゲストティーチャーにも外国人等市民の実情を理解してもらう機会となった。 【取組3<課題①>】外国につながる子どもたち(日本で生育した子どもも含む)と保護者が、それぞれ就学前に学校生活で必要となる日本語、友だちや先生とのコミュニケーション方法、日本の学校文化・習慣などを学ぶ親子教室を小学校と協働で行うことができた。そのために、外国につながる子どもたちや保護者をサポートするための日本語サポーターの心構えや支援方法を考える講座を開催することもできた。
事業の実施期間	平成 29年 6月～平成 30年 3月 ( 10 か月間)

**2. 事業の実施体制**

**(1) 運営委員会**

**【運営委員】**

1	森下 和子	公益財団法人川崎市国際交流協会
2	田中眞砂美	川崎市教育委員会
3	鈴木 克彦	川崎市総合教育センター
4	三枝 正孝	川崎市地域日本語教育推進協議会
5	田村 豊	川崎市幸区役所
6	佐藤 忠	川崎市幸区役所生涯学習支援課(幸市民館)
7	須摩 修一	DST研究所
8	加藤真帆子	NPO日本語・教科学習支援ネット
9	池田 恵子	幸区多文化共生推進事業実行委員会
10	東條 光一	認定特定非営利活動法人教育活動総合サポートセンター



## 【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成29年6月23日 (金) 10:00~12:00	2時間	幸市民館	森下和子、田中眞砂美、鈴木克彦、三枝正孝、佐藤 忠、須摩修一、加藤真帆子、池田恵子、東條光一	1. 28年度事業報告 2. 29年度事業計画の検討 3. 地域の課題と今後の体制づくりの検討
2	平成29年10月6日 (火) 10:00~12:00	2時間	川崎市教育会館	森下和子、田中眞砂美、鈴木克彦、三枝正孝、田村 豊、須摩修一、加藤真帆子、池田恵子、東條光一	1. 29年度事業経過報告の検討 取組1~取組3の各プロジェクトの進行状況の確認 2. 地域の課題に関する情報交換
3	平成30年2月27日 (火) 10:00~12:00	2時間	川崎市教育会館	森下和子、鈴木克彦、三枝正孝、田村 豊、佐藤 忠、須摩修一、加藤真帆子、池田恵子、東條光一	1. 29年度事業経過報告 取組1~取組3の各プロジェクトの進行状況の報告 2. 今後の取組に関する情報交換
4					

## (2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	<p>「外国につながる子どもたちとつなげる」プロジェクトの「就学前の外国につながる子どもたちやその保護者の講座」は、総合教育センターや学校、区役所、保育園等と協働で親子教室を実施し、幸国際子育てクラブトントンの先輩外国人等市民にも参加を呼び掛け、関係づくりを促した。また、「外国につながる子どもたちのDST」による日本語指導や人材育成講座は、総合教育センターや地域の学習サポート教室等と連携して行うことができた。</p> <p>「やさしい日本語でつなげる」プロジェクトでは、これまで「やさしい日本語」の普及を、川崎市市民文化局人権・男女共同参画室外国人市民施策担当や区役所の担当部署と連携し行ってきた。今年度は市内の小中学校や高校、特別支援学校の養護教諭に呼びかけ、学校が発信する文書を「やさしい日本語」で表現できるような研修を開催した。また、地域の日本語学級やにほんごワールドと協力して、「やさしい日本語」でのコミュニケーションの取り方や伝え方を学ぶことができた。</p> <p>「自分の気持ちを伝えてつなげる」プロジェクトは、学校や市民館等公共施設と連携して、地域に暮らす外国人等市民の声を発信するために、DSTの上映会を開催したり、活動に参加した外国人等市民によびかけ、幸区多文化共生推進事業実行委員会のイベントや多文化共生講座に主体的に参加してもらい、社会参加の機会にすることができた。今後もこうした地域のリソースを活用し、それらと外国人等市民とをつなげていきたい。</p>
------	---

## (3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	<p>当該地域では、読み書きを中心として、情報を読み取ったり、自分のことを日本語で表現したりする学習は、生活する外国人市民にとって必要なことであるが実践している例は少なかった。そこで、地域の日本語教育に関わる日本語サポーターの役割や関わり方、外国人市民がまとめた文章を書き、音声で伝えることの意義、そして外国人市民の社会参加などについて、講座を開催し、スキルアップを図ることに努めた。</p> <p>「自分の気持ちを伝えてつなげる」プロジェクトでは、自分の経験や思いを語り、自分のことを伝えるのにぴったりする日本語で表現し、聞き手を意識して書くことや、伝わりやすい音声を意識することを中心に、袴田氏により日本語指導を推進した。</p> <p>「やさしい日本語でつなげる」プロジェクトでは、職員や地域住民に「やさしい日本語」の周知のためのガイダンスおよび外国人市民との協働で「やさしい日本語」に言い換えるワークショップを古屋氏が担当した。また、ゲストチャーとの連携で、行政関係等機関からの文書から情報を読み取るための日本語指導も担当した。</p> <p>「外国とつながる子どもたちとつなげる」プロジェクトでは、大学教員等の講師から外国につながる子どもの指導の心構えや支援方法を学び、理解を深めた上で、外国につながる子どもたちの日本語指導は加藤氏が、保護者の日本語指導は古屋氏が担当した。</p>
----------	--

## 3. 各取組の報告

＜取組1＞										
取組1	取組の名称		『自分の気持ちを伝えてつなげる』プロジェクト							
	取組の目標		過去の事業の取組で、日本語学習者が制作した作品も含め上映会・対話会を実施し、広く地域住民に公開し、外国人等市民の抱える課題を共有する。日本語学習者は、自分の経験や思いを語り、書き、自分の声で録音し、編集し、その映像作品を地域住民に上映し、対話する一連のプロセスで、自分のことを表現するのに必要な日本語を学ぶ。外国人バイリンガルサポーターも含め日本語サポーターが、新規の制作者はもちろん、継続して作品制作をする日本語学習者とも、さらに深い対話活動を成立させるために、聞く力、語りを構成する力を磨く。プロジェクトを通して住民同士がつながり、日本人とか外国人とか関係なく市民として横の関係を築けるようなきっかけをつくる。							
	取組の内容		デジタル・ストーリーテリング(DST)の映像作品制作や上映会・対話会を通して、日本人と外国人等市民が地域住民としてつながる活動を実施した。 A【ともに学ぶサポーター養成講座】(3h×2回、7月、幸市民館)日本語サポーターが、質の良い対話活動となるよう、相手の語りを聞き、相手を深く理解する力を身につけるための研修を行った。 B【DST上映会】(2h×5回、7～8月)これまでに日本語学習者が制作したDST作品を、市内の市民館等公共施設や小中学校で上映し、制作者と参加者で対話会を行った。 C【DST作成日本語教室】(1.5h×11回、9～11月、川崎市国際交流センター)日本語学習者は、経験や出来事を語り、自分の気持ちとともに自分物語を書き、自分の声と写真等で映像編集し、DST作品を作成した。特に、日本語初級者に対しては、母語でやりとりできる日本語サポーターと対話できるように調整し、日本語初級者も十分表現できる環境を準備した。上映会・対話会を実施し、観客である地域住民や行政・教育関係機関の職員とともに外国人等市民が抱えている課題について意見交換を行った。							
	<input type="checkbox"/> 空白地域を含む場合、空白地域での活動									
	取組による体制整備		異なる文化や習慣をもち、物事の見方、捉え方を外国人市民とともに暮らすための課題を共有するために、地域住民や行政関係機関の職員に向けて上映会や対話会を開催した。今後はこれらの課題を解決できるような体制も整えていきたいと考えている。また、外国につながる子どもたちや外国人市民に対しては、地域の催し物に参加するよう働きかけてきたが、他の団体と連携し、さらに社会参加のきっかけをつくれるような体制も整えていきたい。							
	取組による日本語能力の向上		対話型の活動を通して、経験や思いを日本語で言語化し、聞き手を意識して伝えられるよう構成して書くことが学べた。自分のことを書くことを通じて自分のことを表現する日本語の文型や語彙をより確かなものにすることができた。自分の声で録音するため、音声で分かりやすく伝える方法が学べた。映像編集では著作権や肖像権に関するメディアリテラシーなども学べた。上映会では大勢の人に向けた話し方が学べた。地域住民や行政職員等と日本語で対話するために、日常会話とは異なる重要な語彙や社会人にふさわしい日本語の運用能力も身につけられた学習者もいた。							
	参加対象者		川崎市およびその周辺に居住する外国人等市民・日本人市民とその子どもたち	参加者数 (内 外国人数)		174人 ( 23人)				
	広報及び募集方法		市民館など公共施設にチラシを置いた。HPIにチラシを掲載した。メールリストで情報を発信した。							
	開催時間数		総時間	45時間(空白地域	時					
	主な連携・協働先		川崎市国際交流協会、幸日本語学級、幸区多文化共生推進事業実行委員会、幸区学習サポート事業、にほんごワールド、幸子育てクラブトントン							
参加者の出身・国別内訳(人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル	
		12	4		1	2		1		
		モンゴル(1人)、バングラデシュ(1人)、台湾(1人)、中国帰国者(1人)、日本(150人)								
実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名		
1	平成29年7月15日 (土) 13:30～16:30	3	藤沢青少年会館	29	DST上映会・対話会 1	平成26～28年度に日本語学習者が作成したDST作品の上映と日本語学習者を交えての対話会	加藤真帆子 孔敏淑 張子樺	なし		
2	平成29年7月22日 (土) 13:30～16:30	3	幸市民館	11	「物語」を聴く力1	アンケート記入と共有、「聴く」力の概要、ワークショップ(ペアで傾聴・質問・構成・追加質問・フィードバック)、ふりかえり	小澤真人	片桐文雄 加藤真帆子		
3	平成29年7月23日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	11	「物語」を聴く力2	読解ワーク(分析・構成)、聴くワーク(傾聴・質問・構成・再構成・再質問・フィードバック)、相互評価、まとめワーク(コミュニケーションに「物語」形	小澤真人	須摩修一 袴田陽子		
4	平成29年8月1日 (火) 14:00～16:00	2	中原市民館	12	DST上映会・対話会 2	平成26～28年度に日本語学習者が作成したDST作品の上映と日本語学習者を交えての対話会	池田恵子 孔敏淑 猿田勝久	なし		

5	平成29年8月2日 (水) 18:30~20:30	2	教育文化会館	18	DST上映会・対話会 3	平成26~28年度に日本語学習者が 作成したDST作品の上映と日本語学 習者を交えての対話会	池田恵子 孔敏淑 猿田勝久	なし
---	---------------------------------	---	--------	----	-----------------	--	---------------------	----

6	平成29年8月3日 (木) 14:00~16:00	2	高津市民館	16	DST上映会・対話会 4	平成26~28年度に日本語学習者が作成したDST作品の上映と日本語学習者を交えての対話会	孔敏淑 猿田勝久 鶴川裕子	なし
7	平成29年8月31日 (木) 14:00~16:00	2	麻生市民館	36	DST上映会・対話会 5	平成26~28年度に日本語学習者が作成したDST作品の上映と日本語学習者を交えての対話会	池田恵子 孔敏淑 猿田勝久	なし
8	平成29年9月3日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	11	オリエンテーション	活動の概要を説明後、自己紹介をする。DST作品のサンプルを上映する。支援者も含め、互いのことを知り、対話を促す。	袴田陽子	片桐文雄 加藤真帆子 須摩修一 荒明美奈子 池田恵子
9	平成29年9月10日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	14	DSTの支援のあり方	プロジェクトの趣旨・概要を説明する。DST作品のサンプルを上映、支援者同士で対話をしながらマインドマップ(以下MM)を作ること体験する。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 片桐文雄
10	平成29年9月17日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	21	ストーリーサークル	参加者が打ち解けあいながら、それぞれが語る物語に関わりあう(テーマを意識化・思いつくままの語り・他の学習者と支援者は傾聴・感想・疑問点を質問)。	袴田陽子	片桐文雄 須摩修一 池田恵子
11	平成29年9月24日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	23	対話型のマインドマップ作成	ペアで対話をし、話を広げ、深める。キーワードをMM上に書き、学習者は思いを語る。誰に伝えたいかを考える。小グループで対話した内容を共有する。	袴田陽子	須摩修一 孔敏淑 荒明美奈子 池田恵子
12	平成29年10月1日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	22	対話的な構成検討・作文活動	伝えたいエピソードをMMより1~2つ選び、付箋に文を書く。「はじめ、中、終わり」で構成を考える。	袴田陽子	片桐文雄 加藤真帆子 須摩修一 孔敏淑 荒明美奈子 池田恵子
13	平成29年10月15日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	18	対話型の作文活動	支援者と対話をしながら文章化する。グループで音読する。感想、質問を受け、加筆修正する。	袴田陽子	片桐文雄 須摩修一 荒明美奈子 池田恵子
14	平成29年10月22日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	22	推敲・音読練習・録音	日本語教育関係者等のアドバイスを元に加筆修正する。意味が伝わるよう、支援者と読む練習する。録音する。	袴田陽子	片桐文雄 須摩修一 荒明美奈子 池田恵子
15	平成29年11月5日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	21	映像編集	パソコンやスマートフォンの映像編集ソフトを用い、写真等を録音した音声にあわせて編集する。	袴田陽子	片桐文雄 須摩修一 荒明美奈子 池田恵子
16	平成29年11月12日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	23	学習者同士の作品共有	自己紹介・作品紹介の練習をする。学習者と支援者で視聴し、感想や質問をし合う。	加藤真帆子	片桐文雄 荒明美奈子 池田恵子
17	平成29年11月23日 (木) 13:30~16:30	3	川崎市国際交流センター	58	上映会・対話会	地域住民、家族、友人、教育・行政関係者などに広く呼び掛け、作品を上映し、その後、制作者を交えてグループで対話会をする。課題の共有をめざす。	袴田陽子	加藤真帆子 片桐文雄 須摩修一 古屋恵子 川崎宏子(通訳) アランギル・モハメド(通訳) ドン・カック・ターイ(通訳)
18	平成29年11月26日 (日) 13:30~16:00	2.5	川崎市国際交流センター	15	ふりかえり	支援者と対話しながら、これまでの制作過程や自分の変化について振り返りシートに書き、全体で感想を述べ合う。	袴田陽子	加藤真帆子 片桐文雄 須摩修一

## (1)特徴的な活動風景(2～3回分)

## ○取組事例①

【第1回 2017年7月15日】

1. 開会あいさつ、趣旨説明
2. DST上映会～中学生の作品「仲間づくり」「日本との出会い」、大人の作品「大切な仲間」「教えることは学ぶこと」の4作品を全員で視聴した。
3. 対話会～参加者を2グループに分け、制作者2名を囲み、感想を述べたり、質疑応答を行い、思いを交換し合った。
4. 全体で認識の共有～2グループの話し合いについて代表が報告しあい、それぞれの立場で今後自分ができること、していきたいことなどを発表した。
5. アンケート～この企画に対しての感想や意見を所定の用紙に記入した。
6. 交流会～短時間だったが、制作者を交えて感想の交換や情報の交換を行った。



## ○取組事例②

【第17回 2017年11月23日】

1. 開会あいさつ、趣旨説明
2. 趣旨説明、日本語学習者の紹介
3. DST作品の上映会～「私がおどろいたこと・まなんだこと」をテーマに11作品が作成されたので、2会場にわけて上映会を行った。上映作品を提示し、参加者に会場を選んでいただいたがほぼ同数程度にわかれていただけた。上映前に制作者から制作の意図を話していただき、視聴後には2、3の質疑応答を行いながら進行し、次の対話会につなげた。
4. 対話会～それぞれの会場で、さらに参加者を2グループに分け、制作者を交えて感想を述べたり、質疑応答を行い、思いを交換し合った。話し合いの方向をコントロールできる進行役の力量をつけなければならないという課題も見いだせた。
5. アンケート～この企画に対しての感想や意見を所定の用紙に記入した。



## (2) 目標の達成状況・成果

これまでの事業で作成されたDST作品を紹介するために、川崎では川崎市教育委員会との共催で4会場、藤沢では藤沢市みらい創造財団との共催で1会場で上映会を行った。外国人市民を含めた地域住民や日本語教育に携わっている方、学校教育関係者など多くの方とともに作品を観て、制作者の経験や思いを聞く機会が増えたことはよかった。対話会においては、藤沢では外国につながる子どもの課題について話し合い「子どもの母語と日本語のバランス」「相手の文化を知った上での理解」など深い話題についての対話ができ、今後の藤沢でのDSTの取組にむけてよいスタートとなった。川崎では、制作者が課題だと思ふことについて参加者が忌憚なく考えや意見を言い合い、参加者で解決に繋げようとする場面もあった。また、日本語ボランティア対象の上映会では、これまで日本語学習者の思いを聞いたことがなかったという発言もあり、聞かないとわからないという気づき生まれ、普段の自身の活動をふりかえる機会にもなった。日本語学習者にとっても発表の場が増えることで、発表毎に人前での発表の工夫や人に経験や思いの伝え方の上達もみられた。

DST作品を日本語サポーターとともに制作するために実施した参加者アンケートより、物語構成で相手の話を聴くことは、実践するのはむずかしいと答えた参加者もいたが、参加者全員が役に立つと答えている。日本語学習の場面では、相手の話をまとめる時や外国につながる子どものスクワフオルディングなどに応用できると考えていた。日本語サポーターの聴く力の育成は日本語学習者の発言を促したり、安心感を与えたり、学習動機も高めると考えた参加者もいた。またこの講座を通して地域の日本語学習の目的やサポーター自身の成長について考えることもできた。地域住民として、人としてつながることや学び合う参加者として分からないことや知らないことを話し合う場を設けていくことが大切という意見もあげられた。人として心がけておくことなので、機会があればまた参加したいという声が多かった。

DST作成日本語教室は、ストーリーサークル(参加者が打ち解けあいながら、お互いの物語に関わっていく対話型の活動)では複数回参加した学習者にモデルとしてまず「自分が書きたいこと」を話してもらった結果、活発な発言の場となり、聞き手の、他の参加者の発表への関心は高く、集中して耳を傾けていた。「考えることができた」「ほかの人の話にも参加できた」「楽しかった」「おもしろかった」「伝えたいことが話せた」等、全体として「伝えた・共有した」という満足度は高かった。マインドマップ作成に関しては、はじめて経験する人は「習慣がないから、考えたいけどむずかしい」「何が話したいかわからない」「あまりやったことがない」など当惑しているようすの感想がある。そして「短い時間で話の中心を考えて、早く書いてしまいたい」と焦りを感じている。この段階でまとめようとしなくてもいい、いろいろな記憶や思いをまず広げてみよう、ねらいを伝えて作業を進める必要がある。過去に制作に参加している制作者からは「自分のポイントがわかる、重要なことをピックアップできる、話の中心点がわかる」などの意見があり、手法を理解し、役立てているのがわかる。ナレーションの録音に関しては「スピード・発音・イントネーションなどに気をつけた、ゆっくり読んだ、間違えないように読んだ」という声が多い。自分の読み方や不満足な点を自分なりにとらえ、改善しようと努力している。録音には、かなりの緊張を感じているようだ。「もっと気持ちを込めて読んだ方がよかったです」という振り返りも。自分の声の説得力を信じて、声(と気持ち)で意味を伝える作業に自信をもって臨んでほしい。DST編集に関しては「写真の取捨選択、端末機器を使っの編集作業を「手伝ってもらった」人が多いが、一人で編集をした人もいる(経験者)。手伝ったのは、スタッフ・家族・もだちなどで、助け合うことで、よい人間関係が生まれている。上映会については、程度差はあるが、全員が「自分の思いを伝えられたか、理解してもらえたか」について「はい」と答えている。そう思う根拠として、「(参加者の感想が)自分の思っていたことと同じだった」「グループ対話で質問があったから」「感想を言ってくれる人がいたから」「皆が前向きな印象だった」など、オーディアンスの反応を挙げて相手の理解を感じ取っている人、「写真と内容が関連していた」「作品がよくできた」と作品の出来栄への自信から自分の思いが伝わっていると考えている人もある。通訳者の助けも挙がっている。「ひとりではできなかつたと思う」という感慨もあった。支援者との対話活動に関しては、小学生は「説明したり、書いたりするのがむずかしい」など、チャレンジとして感じている一方、「楽しかった」「笑顔で話してくれる」「助けてもらった」と大人とのやり取りを楽しんでもいる。大人の評価は高い。「日本人と話す機会が持ててよかった(普段はできない経験)。話を真剣に聞いてくれる」「日本語のアドバイスがもらえる、文法の説明・文章の修正をしてもらえる」と、コミュニケーションの機会、日本語の理解や上達の機会と捉えている。日本語の能力に関しては、「書く・読む」力、「聞く・話す」力が上達したと感じた学習者が半数いた。DSTでは書くだけでなく、それを読んで伝えることが求められる。サポーターと話し合いながら作るときは、当然ながら聞く力も共に伸びるということのようだ。自分が本当に言いたいことは何かを捉えるために、記憶や内面を探り、それを日本語という外国語で表現することに意識を注ぐ。3か月間、自分の持てる力をフルに使ってその作業に集中することが、一定のことばの力、ことばへの意識(表現するために意味を理解しようとし、言葉を選ぼうとする)を育てるものと思われる。また活動前後の比較で、大きなプラスの変化として挙げたのが「人前で話す」が多く、人前で日本語を話すことに自信を深めた人が多かった。

## (3) 今後の改善点について

DST作成日本語教室は、週末の短期集中コース(10回)として実施したため、家庭などの都合で休んでしまう日本語学習者がいて、個別の対応を要することもあったが、DST作品の形になり始めると参加動機が高まり、学習者全員がどうにか作品を作りあげることができた。作成の過程においても、作品作成のイメージをもてるような活動を取り入れて参加動機を高める活動を取り入れる必要があると思われる。それゆえ、DST作品が完成すると、もっと日本語を学習したいと学習意欲は高まる日本語学習者が多いので、その後の学習へつなげる必要もある。そのため、地域の日本語教室との連携をとって、相互的な日本語学習の位置づけを考えていく必要があるだろう。地域の多くの方に日本語学習者の声を地域に届けたり、地域の日本語学習の場の意義などを地域に向けて発信し、理解してもらったりすることについても、まだまだ課題が残っている。広報の方法を考え、DST作品の上映会や対話会の対話のファシリテーターや日本語サポーターの育成が必要だと思われる。

**<取組2>**

<b>取組2</b>	取組の名称				『やさしい日本語でコミュニケーション』プロジェクト				
	取組の目標				外国人市民、日本語サポーター、地域住民、行政関係機関の職員が「やさしい日本語」によるコミュニケーションによりつながる。日本語学習者は、生活情報を地域社会の仕組みやルールを日本語サポーターとともに学び、生活の質の向上をめざす。日本語サポーターは、日本語学習者と「やさしい日本語」による対話活動を通じ、地域の外国人等市民の課題を知る。行政・教育関係機関の職員と外国人サポーターの協働で「やさしい日本語」への言い換えを学ぶ。より多くの市民に伝わる日本語の表現方法を考えるきっかけを作る。				
	取組の内容				A【やさしい日本語で情報を読む活動】(2.5h×4回、8月、幸市民館、かわさきエコくらし未来館)「エコ(地球の資源を大切にすること)」をテーマに自ら疑問点をあげ、日本語サポーターとともに、情報を集め、まとめて発表した。 B【やさしい日本語講座】(3h×1回、11月、川崎市教育会館)、学校で外国につながる子どもたちとかかわる機会の多い養護教諭を対象に、野外活動や保健関係の書類などをよりわかりやすい文面にする工夫について研修した。やさしい日本語にするためには用語の書き換えで事足りるわけではないことをグループ内で確認し、全体でも共有するように努めた。				
	<input type="checkbox"/> 空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	取組による体制整備				これまで、保育園や区役所、市役所の外国人施策担当と協働で「やさしい日本語」による情報提供ができるように実践してきたが、今年度は、かわさきエコくらし未来館のご協力をいただき、ごみの分別収集などの実状を研修し、日常的に実践する力を育成することに努めた。また、市内の各学校の養護教諭に呼びかけ、「やさしい日本語」による情報提供がさらに進むように研修することができた。今後も川崎市国際交流協会などと連携し、行政に働きかけ、「やさしい日本語」で発信できるような環境整備に努めていきたい。				
	取組による日本語能力の向上				今回の活動はエコライフをテーマにし、疑問を持って施設の見学をし、自分の日本語レベルに見合う発表が最終回でできることを目標とした。普段自分たちが環境についてどのような意識を持っているか、外国人等市民が日本語サポーターと個別に話したり、参加者全員で共有したりしたことの中から課題を見つけ、かわさきエコ暮らし未来館の見学を通して解決した。発表は、名前、疑問に思ったこと、調べようと思った理由、分かったこと、まだわからないこと(これからの取り組み方)を手順として、それぞれの日本語レベルに沿った内容をサポーターとともにまとめた。個々の会話のほか、情報を集めるために説明を読むこと、書くこと、全体に向けて話すこと、相手の発表を聞いたり意見を言ったりすることの練習ができ、日本語能力が向上したと好評であった。				
	参加対象者		川崎市内および周辺に居住する外国人等市民、日本人市民及びその子どもたち		参加者数 (内 外国人数)		38人 ( 10 人)		
	広報及び募集方法				市民館などの公共機関にチラシを置いた。日本語教室参加者に直接呼びかけた。市内の小中学校や高校、特別支援学校などにチラシを配付した。				
	開催時間数				総時間 12.5時間(空白地域 時間)				
	主な連携・協働先				川崎市総合教育センター、幸日本語学級、にほんごワールド				
参加者の出身・国別内訳(人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
		2				2			1
パーラー(3人)、バングラデシュ(1人)、メキシコ(1人)、日本(28人)									

**実施内容**

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成29年8月1日 (火) 9:30~12:00	2.5	幸区市民館	10	エコについて知り、気になることを話す。	普段の暮らしで、気になることについて、サポーターと話す。疑問点を出す。来週の見学のためのテーマを決める。	古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子 孔敏淑
2	平成29年8月8日 (火) 9:30~12:00	2.5	かわさきエコ暮らし未来館	11	自分が知りたいことほどこを見ればわかるか、探す。	施設の方の説明を日本語サポーターとともに聞き、知りたいことについての情報を集める。サポーターはメモを残し、次回原稿づくりのための手助けする。	古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子 孔敏淑
3	平成29年8月22日 (火) 9:30~12:00	2.5	幸区市民館	10	発表の原稿を作る	見学で集めた情報を基に、知りたかったことについて発表原稿を作る。	古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子 孔敏淑
4	平成29年8月29日 (火) 9:30~12:00	2.5	幸区市民館	10	自作の原稿を発表する	発表原稿推敲、練習する。各自発表する。また、他の学習者の発表を聞き、意見を言う。	古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子 孔敏淑

5	平成29年11月17日 (金) 14:00~16:30	2.5	川崎市教育 会館	24	どのようにやさしい 日本語で伝えるか を学ぶ	「やさしく」言い換えるためのポイント を説明したのち、グループで実際に 書き換え、意見交換を通してわかり やすく伝えることの意識付けをした。	古屋恵子	孔敏淑 猿田勝久 エンリケス・マリ セル アン・エヌエン 片桐文雄 手塚文子 吉田和江
---	-----------------------------------	-----	-------------	----	------------------------------	---	------	--

## (1)特徴的な活動風景(2～3回分)

## ○取組事例①

【第4回 2017年8月29日】

1. かわさきエコ暮らし未来館見学についての発表原稿づくり  
(見学時に撮影した写真やパンフレットも活用し、A3画用紙を用いプレゼンテーション原稿をつくる)
- ・自分の名前やテーマにしたこと
- ・なぜ知りたいと思ったか
- ・わかったこと
- ・感想
- ・もっと知りたいこと
2. 発表練習
3. 発表(日本語学習者も日本語サポーターも)
4. コメントを言う
5. アンケート



## ○取組事例②

【第5回 2017年11月17日】

1. あいさつ(NPOの外国につながる子どもたちの事業について)
2. 講師・スタッフ紹介
3. 外国につながる子どもや保護者との関わりで課題と感じることを話し合い(グループで)・全体共有
4. 多言語翻訳されている資料の紹介
5. やさしい日本語とは
  - ・よく使うことばはそのまま残し、( )で説明を加える
  - ・やさしい日本語に正解はない。相手が理解できるよう「やさしい」気持ちで書き換える
  - ・日本語能力試験N3程度のレベルで
6. 「結核」についての資料をやさしい日本語に書き換え
7. 「自然教室説明会」についての資料を5グループに分かれ、書き換え・発表
8. 外国人市民による講評(丁寧に詳しく説明されると難しくなる・「もし・・・」できれば)ではなくはっきり言ってほしい)
9. 講師講評(用語の統一・カタカナはわかりにくい・敬語は省く)
- 10.まとめ



## (2) 目標の達成状況・成果

日本語教室では、施設の方からの情報や見学時に見聞きしたことを写真やパンフレットなどの資料を活用しながら、聞き手にわかりやすく伝わるよう発表の工夫してまとめることができた。発表はA3サイズの画用紙を用いたが、手書きでびっしり日本語を書く学習者もいれば、必要なことのみをがんばって書く日本語学習者もあり、それぞれの日本語のレベルに応じて、日本語サポーターが手助けしながら完成できた。発表は棒読みではなく、自分の言葉でしっかり話すことができ、どの日本語学習者のポスターもお互いの考えを深められるものだった。アンケート回答より「ゴミの分別について知らなかったことが勉強できた」「きちんと分別したい」「リサイクルについてもっと勉強したい」などと生活で役に立ち、日本語学習を通して生活の情報を得ることができたという感想が多かった。学習を発表するという経験が初めての日本語学習者もいたので「むずかしかった」という声もあがったが、「むずかしかったけど、楽しかった」という感想も多くあり、おとなの学びとして主体的な活動が喜ばれたとも考えられる。また日本語サポーターは、これまでの事業のやさしい日本語講座に参加した方もいて、オン・ザ・ジョブトレーニングとして、やさしい日本語で対話し、日本語学習者がどんな日本語の情報がわかっているか、わかっていないかなどを確認しつつ、いっしょに発表原稿にまとめるということができた。また、発表のモデルとして日本語サポーターも発表を行い、それについて日本語学習者からのコメントも言ってもらった。日本語サポーターのアンケートより、「つつい普通段の日本語がでてしまう」「専門用語などの言い換えに迷った」など自身を振り返っての声もあった。どの日本語サポーターも日本語学習者の知りたいことや気持ちを考えながらいっしょに日本語の表現を考えたいということアンケートに書いていた。

講座では、アンケートより、講義の内容や、ワークショップのあり方、今後実践する意欲が持てたかなどについて尋ねた。日本語がわからない生徒にどのように知らせるかということについて考えるいい機会になった、分かることと分からないことが混在する文面ではなく、伝えたい内容を絞ることの重要性がわかった、帰って早速取り組みたいといったいい評価が得られた。養護教諭として、医療施設につなげる可能性もあることから、多言語による問診票のサイトを講義で紹介したが、こうした情報も得難いものであるとの意見があった。講義中のワークショップでグループごとに書き換えたものは、まとめて、成果物として各教諭に送った。

## (3) 今後の改善点について

日本語教室においては、日本語の習得レベルが違う様々な日本語学習者の参加があり、発表原稿をまとめる時間が足りなかった。もう少し、時間をかけて、日本語のレベルに応じたサポートができるとよかった。また、見学施設にお礼を書いて発表内容ともエコ未来館にお伝えするような双方向の活動を取り入れることで、お互いの理解が進んだと思われる。日本語学習者から「環境(ゴミの分別)」についての学習は生活に役立つ内容でよかったという声が多かったが、ほかにどんな生活課題の学習が必要かと聞いたら、「病院」や「教育」についても学びたいという声が聞けたので、今後の学習課題としたい。

講座については、自治体において、やさしい日本語のガイドラインなどの作成むけた動きがあること、教育委員会でも昨年度の本事業の成果により帰国・外国人児童生徒指導コーディネーター向けの講座が開催されたり、国際交流協会での取組などもあることから、少しずつ普及してきていると考えられる。それぞれの機関との連携をとることで、より多くの住民や日本語学習に関わっている支援者や教育・行政機関関係の職員にも、やさしい日本語を使うことがさらに広がっていくことが期待できる。

**<取組3>**

<b>取組3</b>	取組の名称		『外国につながる子どもたちをつなげる』プロジェクト						
	取組の目標		地域に暮らす外国につながる子どもたちを保育園・幼稚園・小学校や地域につなげる。プロジェクトを通して、外国につながる子どもたちのことばの発達を確実にするため、年少期より、家族だけでなく地域で関わる人との関係も築き、地域で支える基盤を作る。発達段階に応じたサポートができるような人材育成をする。保護者が地域の先輩や地域住民となり、子育てに必要な情報を得るための案内や工夫をする。						
	取組の内容		A【子どもに関わるサポーターの養成講座】(3h×4回、7～11月、中原・高津市民館)外国につながる子どもたちの日本語サポーターを対象にスキルアップのための講座を開催した。その講座により日本生まれの子どもたちも含め、外国につながる子どもたちの支援をするための心構えや支援する方法を研修した。 B【プレスクール(親子教室)】(1h×4回×2校、2～3月、市立小学校)保護者と子どもたちの教室をそれぞれ実施し、外国につながる子どもたちは就学前に身につけておく必要のある日本語、生活習慣、きまり等を学習した。保護者は子どもの養育や家庭教育、就学準備、日本の学校文化や習慣などを学習した。 *子どものDST作成日本語教室を計画していましたが、子どもたちが集まらず、取組1Cと合同で実施した。						
	<input type="checkbox"/>	空白地域を含む場合、空白地域での活動							
	取組による体制整備		教育委員会や日本語指導等協力者、地域の学習サポート教室のサポーターと情報交換しながら、地域に暮らす外国につながる子どもたちや保護者に関わる者のスキルアップを図るための講座を開催することができた。今後も各区で日本語指導に関わるサポーターの力を高めていきたい。 また、就学前の外国につながる子どもたちや保護者に日本の学校の習慣を知るための機会を企画したが、その際、保育園や幼稚園、小学校と協働することで一定の成果を見ることができた。今後はさらに行政の学校・地域連携担当や保育所等連携担当などと協力し、外国につながる子どもたちや保護者が相談しやすい体制や、保育園・幼稚園・小学校や地域の先輩などとつながる仕組みを整備していきたい。						
	取組による日本語能力の向上		外国につながる子どもたちは、学校生活に必要な日本語と同時に、学習に必要な日本語の基礎となる日本語に触れることができた。保護者は、日本の学校のことを知り、学校との連絡の仕方を練習し、学年だよりなどから情報を読み取ることや就学準備に関する知識を知ることができたと思う。						
	参加対象者		川崎市および周辺に居住する外国につながる子どもと保護者と日本語サポーター	参加者数 (内 外国人数)		90人 ( 31 人)			
	広報及び募集方法		市民館などの公共機関にチラシを置いた。日本語教室参加者に直接呼びかけた。近隣の保育園や小学校などにチラシを配付し、該当する保護者に配付した。						
	開催時間数		総時間 25時間(空白地域 時間)						
	主な連携・協働先		川崎区および幸区地域ままもりセンター学校連携・保育所等連携、川崎市教育委員会、かわさき市民活動センター、多文化共生保育研修会、幸区学習サポート事業						
参加者の出身・国別内訳(人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
		20	2		1	2			1
		ペルー(1人)、バングラデシュ(4人)、日本(59人)							
<b>実施内容</b>									
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名	
1	平成29年7月30日 (土)13:30～16:30	3	中原市民館	18	日本に暮らす外国の子どもたちについて考える	日本にいる子どもたちの背景、日本語支援の考え方、学習の支援・こころの支援、支援者の役割について講義とワークショップ	菅原雅枝	加藤真帆子 古屋恵子 片桐文雄	
2	平成29年9月30日 (土)13:30～16:30	3	高津市民館	17	中長期的な日本語指導を考える	「外国人」の子どもの多様性、義務教育諸学校で学ぶ外国人の子どもたちの受け入れについて、「特別の教育課程」による日本語指導、「個別の指導計画」、DLA、コース設計、教材、「技能別日本語」プログラム、統合学習について講義とワークショップ	築樋博子	加藤真帆子 古屋恵子	
3	平成29年10月28日 (土) 13:30～16:30	3	高津市民館	13	子どもや保護者の思いを知る	子供を取り巻く状況、様々な考え方・思いがあることを確認するワークショップ、DST作品で保護者や子どもの思いを知る、外国人の両親を親にもつ大学生にライフインタビューをする、地域の学習サポートの報告、課題整理・解決にむけた提案を考える	古屋恵子	池田恵子 片桐文雄 堤直美 王韻綺	

4	平成29年11月25日 (土) 13:30~16:30	3	高津市民館	10	就学前の子どもたちを放っておかないで！～家で・園で・地域で～	日本語支援をしている中で、この講座で何を聞きたいか話し合う。講師がオハイオの「Yochien」で気づいたこと。地域にあるHelp…使えるものはどこにあるか。グループで話し合う。言語は、人とかかわる中で発達する。子どもの困難さと大人の困難さを書き出そう。持続可能な支援に向けて(きらきら教室の取り組みから)	内田千春	加藤真帆子 古屋恵子 片桐文雄 吉田和江
5	平成30年2月7日 (水) 15:30~17:00	1.5	宮前小学校	5	プレスクール(親子教室)	保護者:学校の一日(教科名、○時間目、○時○分から○時○分まで、登校・下校など)、学校の行事(運動会・遠足・懇談会など)や学校生活(持ち物、職員室・保健室・給食室など)、会話練習 子ども:読み聞かせ、呼名・返事、挨拶言葉、名前を書く、折り紙遊び、歌遊び	池田恵子 片桐文雄	保崎万里
6	平成30年2月10日 (土) 10:00~12:00	2	幸町小学校	21	プレスクール(親子教室)	保護者:学校の一日(登校の注意)、学習内容、行事(入学式・運動会の注意)、持ち物(筆箱・鉛筆など、名前を書く)、入学までにできるようになってほしいこと、守ってほしいこと、放課後事業「わくわく」紹介 子ども:呼名・返事、歌・手遊び、体の部位の名称・ゲーム、トイレの使い方 親子合同:音読の○つけ練習、持ちものについてゲーム(はさみの使い方)、自分らしく学校生活を送るために	石川千幸 加藤真帆子	加藤香代 大久保光 保崎万里 金春梅
7	平成30年2月14日 (水) 15:30~17:00	1.5	宮前小学校	5	プレスクール(親子教室)	保護者:学校の一日(学校用語・会話練習)、入学式、持ち物(名前など)、算数用語、連絡帳を書く 子ども:読み聞かせ、自分の名前をひらがなで書く、折り紙遊び、歌遊び	古屋恵子 片桐文雄	保崎万里 池田恵子
8	平成30年2月16日 (金) 15:30~17:00	1.5	幸町小学校	5	プレスクール(親子教室)	保護者:学校の一日(登校・下校・早退・遅刻・職員室の語彙、インターホンや欠席電話の会話練習)、入学式(服装、持ち物、購入方法の情報交換)、学校への持ち物(ふでばこ、鉛筆の本数、体操着(半袖、長袖)、赤白帽、体操着袋、給食用ナフキン、マスク、袋・それぞれに記名すること)、連絡帳を書く 子ども:子ども同士・先生への挨拶の仕方、呼名・返事、ゲーム、読み聞かせ	古屋恵子 片桐文雄	保崎万里
9	平成30年2月17日 (土) 10:00~12:00	2	さくら小学校	6	プレスクール(親子教室)	保護者:学校の一日(登校の注意)、学習内容、行事(入学式・運動会の注意)、持ち物(筆箱・鉛筆など、名前を書く)、入学までにできるようになってほしいこと、守ってほしいこと、放課後事業「わくわく」紹介 子ども:呼名・返事、歌・手遊び、体の部位の名称・ゲーム、トイレの使い方 親子合同:音読の○つけ練習、持ちものについてゲーム(はさみの使い方)、自分らしく学校生活を送るために	石川千幸 加藤真帆子	大久保光 田村葉子 山口ユイナ
10	平成30年2月21日 (水) 15:30~17:00	1.5	宮前小学校	5	プレスクール(親子教室)	保護者:欠席・早退・遅刻とその理由を言う、教助詞、連絡帳・学級だより・学校だよりを読む、音読カードの書き方 子ども:読み聞かせ、折り紙遊び、輪飾りづくり、歌遊び、体の部位、ひらがなスタンプ、音読練習	古屋恵子 片桐文雄	保崎万里
11	平成30年2月28日 (水) 15:30~17:00	1.5	幸町小学校	5	プレスクール(親子教室)	保護者:欠席・早退・遅刻とその理由を言う、教助詞、連絡帳・学級だより・学校だよりを読む、音読カードの書き方 子ども:学習の始めの挨拶、呼名・返事紙芝居、ゲーム、名前を書く、読み聞かせ、折り紙遊び、学習の終わりの挨拶	古屋恵子 片桐文雄	保崎万里 池田恵子
12	平成30年3月9日 (金) 15:30~17:00	1.5	幸町小学校	8	プレスクール(親子教室)	保護者:学校のお便りを読む、承諾書の場合は返事を書く練習、ガイドブックの見直しと入学にむけて質問を受ける 子ども:挨拶、呼名、紙芝居、ひらがなスタンプ、自己紹介・質問ゲーム、輪飾りづくり、挨拶	古屋恵子 片桐文雄	保崎万里

## (1)特徴的な活動風景(2～3回分)

## ○取組事例①

【第4回 2017年11月25日】

1. グループワーク: 受講者が日本語支援をしている中で、この講座で何を聞きたいかグループで話し合い、全体共有。
2. 講義: オハイオの「Yochien」を始めて気づいたこと(さまざまな子どものケースの紹介など)
3. グループワーク: この地域にあるHelp…使えるものはどこにあるか(川崎市、藤沢市、横浜市など)。グループで話し合い、全体共有。
4. 講義: 言語は人とかかわる中で発達すること、安定した心や非認知能力などの非言語の部分の発達について
5. グループワーク: 子どもの困難さと大人の困難さを書き出し、全体共有。
6. 講義とまとめ: 持続可能な支援に向けた提言(愛知県でのさらさら教室の取り組みの紹介など)
7. 質疑応答、アンケート記入



## ○取組事例②

【第6回 2018年2月10日】

\* 1と2は同時進行。

1. 保護者(多言語の資料とパワーポイントで説明)
  - ・学校の日(登校の注意)
  - ・学習内容、行事(入学式・運動会の注意)
  - ・持ち物(筆箱・鉛筆など、名前を書く)
  - ・入学までにできるようになってほしいこと、守ってほしいこと
  - ・放課後事業「わくわく」の担当者による説明と紹介
2. 子ども
  - ・呼名/返事
  - ・絵本の読み聞かせ(手)
  - ・歌
  - ・手遊び(むすんでひらいて)
  - ・体の部位の名称/ゲーム(はなはなゲーム)
  - ・体調の不調の言い方とゲーム(ジェスチャーあてゲーム)
  - ・グループごとにアクティブラーニング(体の部位の名称の絵を見てひらがなスタンプを押す・福笑いゲーム・多言語絵本)
  - ・トイレの説明(実際に行って使う、手を洗う、和式のトイレの説明)
3. 親子合同
  - ・音読練習(宿題の音読練習として、子どもが実際の国語の教科書音読し、保護者が○つけをする)
  - ・学校に持ってきてもよい持ちもの、だめな持ち物ゲーム(一覧カードを見て選び、はさみを使ってばらばらにし、ミニランドセルに入れる)
  - ・母文化、母語を大切に、自分らしく学校生活を送ることの大切さについてのお話



## (2) 目標の達成状況・成果

子どもに関わるサポーターの養成講座終了後、アンケートを実施したところ、「外国につながる子どもの状況、課題、支援の在り方、自分の役割」について意識化されたという回答が毎回ほぼ半数以上あった。また、コメントとして「子どもの支援について基本的なことを一から学べて本当に勉強になりました。自分が担当する子どもの事を改めて考える機会になりました」「参加して、日ごろの支援のいきづまりを打破できそうなたくさんのヒントをいただきました」というように、基礎的なこと(外国につながる子どもの発達、状況、心構え等)から、体験(英語で算数のテストを受ける等)や実例(他地域での取り組み、日本生まれの外国籍の大学生の話や、保護者の思いのDSTを見る等)も含めて学びつつ、すでに実践している課題解決の糸口(計画の立て方、子どもの課題のとらえ方、教材等)を得られたことへの好意的な感想・意見が全体を通じて得られた。参加者の属性が多岐にわたり(外国につながる子どもにすでに関わっている国際教室担当者や日本語指導員や地域の支援ボランティアや保育士、教育行政担当者、これから支援をはじめたいと考えている日本語教育関係者やボランティア希望者や大学院生等)、また各自の活動地域も川崎に限らなかったため、お互いの状況や課題、情報を交換すると気づきも多く、「グループワークがあり、いろいろな立場の方の意見が聞けておもしろかったです」というコメントにあるように、学びあいの機会となっていたことも伺えた。

プレスクール(親子教室)は、今年度は教育委員会や多文化共生保育研修会、小学校長会の協力を得て、土曜日に学校で2回開催できたこと、また2校で各3回開催できたことは大きな成果であった。開催案内も日本語版だけでなく、本事業の受講者の力を借りて、多言語(英語・韓国語・中国語・タイ語・ベトナム語・スペイン語等)で作成し、配布できたことも新しい試みであった。また、子どもには安心して小学校入学後に学習生活できるよう、「日本語学習への関心を喚起する」「日本の学校生活の基本を知る」「日本の文化(主に遊び、読み聞かせ等)への関心を高める」等のねらいでプログラムを作成し実施した。読み聞かせに集中して聴き入り、折り紙遊びやじゃんけん遊びに夢中になり、プリントの身体各部位に名称を平仮名で押印する活動を楽しんだりする子どもたちの姿が確認された。3回連続して親子参加した保護者の「参加する前は入学してからの日本の学校生活にとっても不安が大きかったけど、今は安心して迎えられる」という感想が親子教室の成果を象徴している。

子どものDST作成日本語教室は、大人の日本語学習者と異なり、子どもが今表現したいことを見つけられるようにするためには、何気ない学校生活や家庭生活などを話題にして日本語サポーターがじっくりと聴くことが大事と考え、今回の制作テーマは脇に置いて、まずサポーターを交えた対話会に時間をたっぷりかけた。その過程で日本語サポーターや通訳者との関係性も深まり、その後の制作もスムーズに行えた。伝えたいことをアトランダムに書き出すイメージマップ手法⇒「はじめ・中・終わり」の組み立てに整理⇒日本語の文章に書き起こす⇒音読練習・録音作業⇒映像編集という流れの活動だったが、日本語で表現する際の母国語との微妙な感じの違いについては通訳者を介しての話し合いがとても有効であった。完成したDST作品の上映会では、本人も語り、参加者の多くから感想をもらい、自己肯定感を高めることができていた。

## (3) 今後の改善点について

子供に関わるサポーターの養成講座は、今年初めての開催で、参加者の属性や目的が予測がつかなかったことにより、初心者を意識した内容だったり、学校教育者には必要でも地域支援者には難解な内容であったり、内容を絞るのが難しかった。共通理解として必要なことを伝え、話し合いの中で課題を意識するところまではある程度到達したと考えられるため、ピンポイントで各支援者が感じている課題解決(具体的な教材、支援方法、連携方法等)を参加者同士で検討するなど、より実践的な取り組みをする時間を設けたい。また、なかなか同席することがない様々な参加者がいる中で、講座以降もつながりが生まれ、将来的には連携できるようなしなかけ(メーリングやグループ作成や、オフ会等)を設け、学びあいの機会を持続できるような場を設けたい。

外国につながる子どもたちの小学校入学者数増加が見込まれる状況下において益々、プレスクール(親子教室)実施の必要性が求められていると考える。今年度は、外国につながる子どもたちの小学校入学者数の多い川崎市・幸区において実施(各区において土曜日1日[各1校]、平日3日[各区1校])したが、次年度も同一回数で実施し、まだまだ参加者が少ないので参加者をより増やすPRの仕方も含めて、教育委員会や関係機関とより理解を深めて実施していきたい。

子どもにとって自分に身近で切実な出来事を題材にしてDSTを作成することは、作成過程において日本語を学ぶのにとっても有効な方法であることは確実であるが、外国につながる子どもの参加者を確保するのに毎回苦労している。外国につながる子どもを対象にした日本語支援学習を組織し、その学習の一環としてDST活動を位置づけることが、これからは求められる。

#### 4. 事業に対する評価について

##### (1) 事業の目的・目標

地域社会で外国につながる子どもたちおよび外国人等市民が、対話型の活動を通して、生活上、あるいは自分のことを伝える上で必要な日本語を習得し、日本語でのコミュニケーションのあり方を学ぶ。また、日本語母語話者も、取組を通して、市民同士としての関係が築けるようなコミュニケーションのあり方を学び、ともに学びあう。そして、これまでの成果を広く地域住民や行政・教育機関等に発信し、地域に暮らす外国人等市民の現状や課題の理解を深め、多文化共生のまちづくりに寄与する。

##### (2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

日本語学習者および日本語サポーターのアンケートやインタビューにより、日本語学習者は日本語サポーターとの対話型の活動で、自分のことを表現したり、生活に必要な情報を得たりすることができたことが明らかになった。そして、取組の中で、自分のことや自分が表現したいことについての必要な語彙や文型も学ぶことができたり、発表という場での聞き手の反応もあり、さらなる日本語学習に対する意欲の向上もみられた。日本語サポーターも、対話型の活動の中で、相手に伝わるやさしい日本語を使おうと努力している様子が見られた。また、今回「聴く力」などの講座を事前に取り入れることで、まず日本語学習者が何を言いたいのか構成を意識しながら聴くということを意識できたと考えられる。また、日本語学習者の経験や思いや気持ちなどをさらに質問をし、お互いに自分のことを語りあうことができた。対話型の活動を通し、信頼関係が築け、お互いの経験や考え、思いなどを知ることができ、相互理解が深まったと考えられる。ただし、何を聴くか、どのように聴くかの実践に関してはまだまだ迷うという声もあった。

昨年度まで日本語学習者としての参加だったが、今年は日本語サポーターとして活動に関わり、日本語学習者のサポートをしてくれ、母語での支援ややさしい日本語での対応は、日本語学習者にとって安心できる場となった。また、発表の場や対話のやりとりの場面で、通訳やスタッフによる媒介語でのサポートは、日本語でのやりとりの時の表情より和らいているように見えた。また、外国人のバイリンガルサポーターとしての活躍は、日本語学習者にとっての将来のモデルとなるのではないかと思われた。

DST上映会の実施場所を昨年より増やすことより、多くの地域住民や教育・行政機関関係者の方に外国人市民の声を届けることができた。また、外国につながる子どものサポーターの養成講座を実施することにより、他地域での課題を知り、課題の共有を行い、地域をこえて課題の解決にむけて話し合うことができた。

##### (3) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

各取組に地域で日本語教室のボランティアをしている方が、本事業に日本語サポーターとして協力してくれた。日頃の日本語教室とは違う様子を見せた日本語学習者がいたことに気づいた日本語サポーターもいた。対話型の活動を多く取り入れているので、日本語学習者のそれぞれの日本語の習得レベルに合わせ、相手に伝わるやさしい日本語で対応する必要があり、大変さもあるが、講座や実践の場で、相手の話の聴き方を学び、姿勢を身につけつつ、ほかの日本語サポーターやスタッフから質問の仕方・タイミングを学ぶことができたようだ。

幸区多文化共生推進事業実行委員会との連携により、地域の多文化共生のためのイベントで、学習した成果の発表ができ、本事業だけではなく地域住民への発信はできたと考えられる。実行委員会が実施する多文化共生のイベントに、日本語学習者が参加し、地域で双方向に、人と人のつながりができつつある。

日本語学習者が作成したDST作品の貸出も、講座等に参加した方から申込みがあり、地域の日本語学級の日本語ボランティア入門研修や大学の講義等で活用されている。

プレスクール(親子教室)では、保育園の職員などにより構成される多文化共生保育研修会との連携をきっかけに、川崎市および幸区役所地域みまもりセンター保育所等・学校連携担当の理解が得られ、保育園や幼稚園や川崎市および幸区の小学校長会を通し、外国人保護者へも広く広報ができたと思われる。昨年より多くの就学前の子どもと保護者の参加があった。保護者は日本での学校教育の経験がなく、また地域にもあまり知り合いもなく、子どもの入学に対し、わからないことがわからない状態で、不安があったようだ。その保護者からとても安心できたという声があった。学校や保育園が地域の団体とつながり、お互いに外国人に声をかけあうことで、より参加動機も高まるようだ。

##### (4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

本年度は、教育委員会や小学校校長会、川崎市および幸区役所の地域みまもりセンター等から保育園、幼稚園、小学校などの機関への周知が昨年度以上にできた。取組内容についても教育委員会や多文化共生保育研修会等との連携・協力体制ができ、相互によりよい内容が提供できた。親子教室は昨年度より開催会場も増やすことができ、多くの小学校入学予定者が参加し、小学校には事前学習の場の必要性が伝えられた。またDST作品をきっかけに外国人の声を聴くことは、本事業の実施以外にも、学校との連携では中学校国際理解部会の研究会の研修として、夜間中学校の授業の一環として、教育委員会実施の識字・日本語学級のボランティア入門研修の一環として、地域の団体の多文化イベントの発表として等実施できた。その際、広報は、各取組毎にチラシを制作し、協力機関や実施会場や地域の日本語学習活動をしているグループに広く配布したり、タウン紙や新聞各社にも告知をしたので、一部記事として取り上げてくれた。

## (5) 改善点, 今後の課題について

## (1) 現状の課題

①取組の実践内容は、日本語学習者の実態などに合わせ、改良しながら継続している。初年度から毎回参加している日本語学習者もいるが、本取組は短期の回数も限られている実践なので、学習意欲の向上した日本語学習者は継続的に行われている地域の日本語教室につなげていくことが課題である。地域の日本語教室と学習内容などの情報を共有したり、双方で相乗効果が出るように連携して地域の日本語教育の体制を整えていく必要がある。

②保育園が増設される中、外国人市民の利用も増大し、保育園と保護者との文化習慣の違いが顕在化していることがわかった。就労等で社会参加はしているが、地域とのつながりがあまりなく、地域での子どもの安心安全の確保ができず不安な様子もみられた。また、地域に日本語学習の場があることを知らない外国人等市民もいることもわかった。知っていても時間的に合わない場合もあり、様々な曜日や活動をする地域の日本語学習の場や子育てについて相談できる場の設置が必要だと考えられる。また、就学前のプレスクール(親子教室)実施より、日本の学校のことがわからず不安をかかえている保護者が多くいることがわかった。また子どもたちの多くは保育園や幼稚園に通園しており、生活においては日本語の会話にこまる様子はあまりみられなかったが、気持ちを表現することなどはできない子どもがいた。多くは複言語・複文化下で生活しているようだが、母語や母文化を大切にすることを保護者だけでなく子どもにも伝えていくことが大事だと感じ、伝えた。

③活動を地域で知ってもらったり、地域に外国人市民の声を届けるのには、地域住民と外国人の対話をファシリテートする力を日本語サポーターが身につける必要がある。

## (2) 今後の改善点

①地域で行われている継続的な日本語学習の場で、DST作成の実践を取り入れ、地域への発信に活用するなど、地域に根付いた活動として位置づけていきたい。

②外国につながる子どもたちが増える中、活動の中で、複言語・複文化で生きる子どもたちのことを理解してもらうために学校や地域との連携ができるような体制をとっていきたい。

③対話型の活動における日本語サポーターのトレーニングが必要である。日本語学習者だけでなく、地域住民と外国人の対話を取り持つことができるサポーター養成が必要だと考える。

## (6) その他参考資料